

## 緩和ケアにおける作業療法の有効性にかかる検討

小山田玲子

介護老人保健施設とわだ

## 【はじめに】

緩和ケアは、がんの診断と共に提供されるべきといわれており、physical pain・mental pain・social pain・spiritual painといった全人的苦痛(total pain)を和らげ、患者、及び家族のquality of life(以下、QOL)を向上させるアプローチである。

今回、乳がん術後の事例(以下、ケース)に対して作業療法を提供した。その結果、ケースと家族のmental pain・spiritual painの緩和を図ることができた。

本ケースへの介入を通じて、緩和ケアにおける作業療法の有効性について検討する。

## 【事例紹介】

90歳代 女性

診断名：乳がん(左乳房切除・腋窩郭清清)

現病歴：X年1月、左乳房上外側部乳がんと診断

X年2月、左乳房切除・腋窩郭清実施

X年3月、老健施設入所

## 【リハビリテーション評価】

左上肢に浮腫と熱感、自発痛、左手指の痺れ感を認めた。痛みから自分で左上肢を擦っている場面が見られ、日常生活で左上肢の使用は見られていたが苦痛感・不自由感を伴っていた。家族はケースが左上肢を痛がる様子から不安を感じていた。

ケースは孫との二人暮らしで家事は孫や長女(別居)が行っていたが、ケースは「家に帰ったら畑仕事や孫の世話をする。だから左手が痛い但我慢してでも使って良くしたい」と発言。長女の情報ではケースは不十分ながらも孫の衣類の洗濯やボタン付け等を行っていたとのことだった。

## 【介入の方針】

まずはphysical painの緩和により日常生活での苦痛感の軽減を図ることとした。左上肢の浮腫に関して、乳がん術後であったこと、浮腫は左上肢に限局性のものであったことからリンパ浮腫を疑い、その緩和を目的に用手的リンパドレナージュを実施することとした。又、ケースの発言、及びご家族の情報から筆者は、長年、孫の世話を役割としてきたケースが、疾病により役割の喪失を感じているのではないかと考え、これを自分の存在や価値観への問いといわれるspiritual painと捉え、

ケースが得意としていた裁縫(布巾作り)を作業療法として実施することとした。

## 【結果】

左上腕・前腕部の周径はわずかに減少し浮腫は軽減、左上肢の熱感・痛み・左手指の痺れ感も消失した。その結果、日常生活での左上肢使用時の苦痛感・不自由感は和らぎ、ケース自身も「楽になった」と発言。ケースの様子からご家族も「痛がる様子がなくなりよかった」との感想が聞かれた。又、作業療法に関して当初はやや受動的な様子だったが、徐々に「今日はここまで頑張る」「針が進んで面白い」と主体的な発言が増えた。完成した作品を見て「きれいだ。美しい。」と喜び、作品をご家族に渡すと「あんなに左手を痛がっていたのに、こんなに縫い物ができるなんて。本当に良くなった。」との感想が聞かれた。

## 【考察】

ケースの痛み・痺れ感の緩和はphysical painの緩和であり、その結果、日常生活での苦痛感・不自由感の改善に至り、これはmental painの緩和にも通じたと考える。Physical painの緩和は生活上、最も早期に緩和すべき苦痛であり、これによって作業療法のスムーズな実施が可能であったと考える。又、役割の喪失によるspiritual painの緩和を目的に作業療法を実施した結果、ケースの達成感や満足感に加え、自宅復帰後にケースが希望し担うであろう役割への自信付けにもなったと思われる。これはspiritual painの緩和を図ることができたのではないかと考える。ご家族の発言からも安心・安堵感がうかがわれ、ご家族のmental pain・spiritual painの緩和も図ることができたのではないかと考える。

作業療法は生活機能に応じた作業を通じて、その人らしく生きる支援が可能である。一方、WHOの定義によると緩和ケアの対象はがん患者のみにとどまらない。以上のことから疾病や加齢による障害を有していても、その人や家族が楽に生きることを支援する緩和ケアにおいて、作業療法はphysical pain・mental painの緩和はもちろんのこと、spiritual painの緩和に大きな役割を果たすことができるのではないかと考える。